

## 聶耳(ニエアル)と雲南——中国国歌作曲者の少年時代

岡崎 雄兒

### 一、はじめに

中国の国歌である「義勇軍行進曲」を作曲した聶耳(ニエアル)<sup>(1)</sup>が、一九三五年七月十七日に神奈川県藤沢市の鵠沼海岸で溺死<sup>(2)</sup>してから、今年はちょうど七十周年になる。

数々の革命歌曲を作曲し、中国革命に大きな影響を与えたと言われる聶耳について、筆者はこれまで本論集に、「聶耳(ニエアル)」「中国国歌作曲者と日本」(第五号)、「中華人民共和国国歌の成立過程研究」(第六号)、「一九三〇年代、上海における聶耳(ニエアル)」(第八号)の三編の論文を発表してきた。これらそれぞれの論稿の中で、聶耳と日本との関係、彼が映画音楽として作曲した「義勇軍行進曲」が一九四九年の新中国建国後、暫定国歌となり、やがて正式に国歌になった経緯、さらに聶耳の力強い革命歌曲がどのような時代背景のもとに誕生したのか、創作活動を行った上海での日々を、彼が残した日記、書簡などを通じて検証し、中国革命において聶耳が作曲した歌曲の果たした役割を考えた。聶耳の作品は抗日戦争を戦った中国の兵士や民衆に愛された。その創作は、いわゆる革命的リアリズムの手法に沿ったものと言われるが、ではそのような手法や「革命思想」を聶耳がどう身につけたのか、彼がどのような家庭で育ち、

(1) 聶耳(ニエアル)と雲南

学校教育を受け、社会的な経験を積んできたのか、さらに出身地の雲南省という土地が聶耳の思想形成にどのような影響を与えたのかを本稿では考える。

## 二、雲南省とは

聶耳は一九一二年二月十五日、中国西南に位置する雲南省の昆明に生まれた。雲の南と書いて雲南、なんとも想像力をかき立てられる地名である。ここは北京や上海から遙か遠く離れ、東隣りの貴州省へと連なる雲貴高原に属する山地の省である。南側はミャンマーやベトナムに接する。面積は三九・四万平方キロメートルと、日本よりやや広い。緯度的には昆明が沖縄県の宮古島あたりになる。人口は四千三百万人と日本のほぼ三分の一である。

雲南省には少数民族のメツカとも呼ばれるほど多くの民族が住んでいる。ちなみに中国は五十六の民族により構成されているが、そのうち二十六の民族が生活している。また天ぷら、赤飯、断髪、お齒黒、歌垣、若者宿など日本の文化・風習と通じるものが多いことから日本文化のルーツがあると言われることもある<sup>3)</sup>。

発展著しい沿海部に比べると、西部地域にある雲南省は取り残された印象がある。しかし実際は鉱産物資源が比較的豊富なこと、伝統のタバコ産業がなお健在であることから産業はそれほど遅れてはいない。また豊かな自然に恵まれており、全国有数の観光地として人気を集めている。省都の昆明は中国各地と空路で結ばれていて、日本からも関西空港から直行便が週二便飛んでおり、およそ四時間半で、「春城」(春の町)と呼ばれる昆明に着く。

歴史的に雲南省を見るとどうだろうか。周知のように十九世紀末から二十世紀初めにかけての中国は、帝国主義諸国がそろって進出し覇を競っていた。日清戦争後の一八九九年、列強の中国侵略に反抗して山東省で蜂起した義和団が、

一九〇〇年六月、北京に入城し、各国の公使館区域を包囲したため、日、英、米、露、独、仏、伊、奥の八カ国連合軍の共同出兵によつてまず華北が、ついでロシアの勢力拡大により東北が矛盾の焦点となつていた。

しかし帝国主義諸国の矛先は、これら地域にだけではなく実は雲南など西南地域にも、華北や東北に劣らないほど鋭く向けられていた。清朝末期の雲南は、帝国主義諸国の侵略と向き合う、まさに最前線のひとつだった。

雲南の多くの青年・学生は、清朝の弱腰を責め、政府は雲南を外国人に売り渡そうとしていると見なし、外国の侵略から国を守ろうという強い民族意識をいだくようになっていった。彼らは清朝打倒を呼びかける革命派の主張に共鳴し、反清革命に積極的に参加した。

その反清革命の主体となつたのは、日本に留学した青年たちであり、清末に創設された新式軍隊（新軍）であつた。東京で雲南出身の青年たちが発行した『雲南雜誌』には、彼らの強烈な民族感情が随所に記されている。

聶耳が生まれる前年の一九一一年十月、辛亥革命の発端となつた武昌蜂起が成功し、清朝が打倒された。翌一九一二年一月一日、孫文を臨時大統領に中華民国が成立する。この辛亥革命の影響は、辺境の雲南まで及んだ。

一九一一年の旧暦九月九日、漢方医だつた聶耳の父、聶鴻儀は親戚が急病になつたため往診に出ている。夜がふけると昆明の町は省都とはいえ、人通りも途絶える。突然、大砲の音がドーン、ドーンと聞こえてきて、みな生きた心地がしなかつた。父が無事に帰れるだろうか、家族の心配が限界まで達した頃、ようやく父が帰ってきた。

翌日になって昨晩は、辛亥革命の影響を受けた清朝政府内部の一部軍人たちが、雲南の統治当局に対し軍事攻撃を行つたことが分かつた。彼らはたった一晚の戦闘で主要部隊全部を占領し、二百余年にわたつて続いた雲南における清朝の統治を覆し、清朝の龍の国旗に代えて、赤・黄・藍・白・黒の五族共和の旗を掲げた。

雲南総督として君臨していた李鴻章の甥、李経義は変装して逃亡してしまい、清朝の兵隊はみな革命軍に帰順し、清朝の雲南省統治は完全に終りを告げた。

### 三、聶耳の誕生・幼年時代

聶耳は、清朝崩壊という歴史の大きな転換期に生まれた。聶耳の誕生日は旧暦では十二月二十八日である。正月の直前に生まれたためでたい子として父親は非常に喜んだという。彼にはすでに五人の子どもがいた。上の二人、すなわち長男守拙と長女蘭茹は病死した先妻の子で、その後結婚した彭寂寛との間に二女惠茹、次男守誠、三男守先（のち叙倫と改名）がいた。

聶鴻儀はもともと昆明から南へ八十キロばかり離れた玉溪県の出身で、地元で評判の良い開業医であった。しかし玉溪での生活にあき足らず清の光緒末に一家をあげて昆明に引っ越してきた。家を借り医院を営む傍ら、「成春堂」という看板を掲げて薬店も経営していた。

母の彭寂寛は、少数民族のタイ族の出身であった。彼女が漢族でなく、少数民族の出身であったことは聶耳の精神形成に大きな影響を及ぼすことになる。

この母が聡明な人であった。彼女は若くして両親を失い、祖父母に育てられたが、大変向学心が強かった。祖父は当時のことなので封建思想に固まっております、「女は才能のないのが道徳である」と考えていた。しかし彼女は祖父に隠れて兄から字を習った。聶鴻儀と結婚した後は、父親とは違い進歩的な考えをもつ夫の助けを受けて、医学書を勉強し、夫の頼りになる助手になった。

聶耳は三歳の時にすでに三百余の漢字を覚え、四歳になると五百字の漢字を覚え、小学校では常にトップの成績であったと伝えられているが、これもこうした勤勉な両親の影響があつたことであろう。

一九一六年七月十一日、聶耳がまだ四歳のとき、肺結核のため年初より病床にあつた父が亡くなった。治療のため家

の財産をその時までにつかり使い果たしてしまい、葬儀の費用を親戚中から掻き集めなくてはならなかったという。一家の大黒柱を失った同家では、いつのまにか母が患者を診断し、薬を処方するようになっていた。この年、母は正式に医師国家試験に合格した。夫の医療活動を引き継ぎ薬局も経営した。

一九一八年、聶耳は親戚から学費を立て替えてもらい、昆明県立師範付属小学校に入学した。勉学に励み、成績はいつも優秀であったという。

母は夜も遅くまで針仕事をしながら、いつも子供たちに雲南の民謡を歌って聞かせたり、学問に打ち込んだ先人の物語を話して聞かせた。こうしたことから聶耳は幼いときから伝統芸術の感化を受け、正直で勤勉、学問を好む気風が養われたようだ。

また隣家の家具屋の主人から笛を教わり、その後二胡、三弦、月琴などの民族楽器やオルガンの演奏を学んだ。音楽では聶耳の右に出る者はなく、学校では音楽クラブを組織して、演奏を指揮した。また演劇で舞台に立ったこともあった。クラスのリーダーに選ばれるなど活発な生徒だった。

一九二二年の春、聶耳は昆明県立師範付属小学校を修了した。成績はトップだった。引き続き同校の高等科へ進学するつもりであった。しかし校長は童子軍（ボーイスカートのようなもの）に入っていた者はそのまま進学を認めるが、童子軍に入っていない者には認めないと言った。童子軍に入るのは童子軍の制服のほか皮ベルト、万能ナイフ、麻縄などが必要であり、聶耳の家では学費を出すのが精一杯で、このようなものを買う余裕はなかったのだ。

聶耳は四年間一緒に学んだ同級生たちと仲良くなっていたし、教師たちの自分への配慮を忘れることが出来ず、この学校の高等科へ進学したかった。だから校長に対し何度も童子軍に入っていることを高等科の入学資格にすることは不合理であると掛け合った。しかし校長は応諾しなかった。

聶耳はやむなく私立の求实小学校高等科に入学した。幸いなことに成績が優秀だったので、家庭の事情が考慮され、

授業料や諸雑費が減額された。またこの学校は情操教育に力を入れていた。民族楽器のほかオルガンなどの科目もあり、放課後も楽器の演習が行われた。音楽教育に力を入れていた学校に入ったことが、その後の聶耳の成長に大きな影響を与えた。

ところで先に記したように聶耳の両親はもともと昆明から八十キロあまり南の玉溪の出身である。母の祖父母は、その玉溪からまた五十キロほど離れた峨山というところに住んでいた。しばらく前、母が大病を患い、奇跡的に助かったことを知った母の祖父母は峨山の実家に一度帰ってくるよう求めてきた。学校の休みを利用して母は二人の兄と聶耳をつれて帰ることにした。

最初に昆明湖を船で渡った以外はほとんど徒歩の旅だった。病み上がりの母は竹駕籠に乗ったが、子どもたちはひたすら歩いた。途中で山賊が現れ、恐い思いをしたこともあったが、ともかく無事、玉溪を経由して峨山に着いた。

祖父母の家は峨山の町からまた少し離れた村にあった。祖父母は、四人を迎えて大喜びし涙を流した。この村では少数民族と漢族が一緒に住んでおり、タイ族が比較的が多かった。彼らの服装は昆明と異なり、話している言葉も違った。祖父はタイ族の人間であり、民族衣装を着ていた。彼と近所の人との話は聶耳たちにはまるで分からなかった。

今でこそ国の政策として民族の平等と団結を掲げ、憲法にも「各民族はすべて平等」と規定されているが、伝統的に漢族は各民族の中心に自分たちを置き、少数民族を見下してきた。雲南においても漢族はタイ族に対し蔑視感情をもっていた。母は聶耳たちが差別を受けるのを避けるため、祖父母がタイ族であることを秘密にし、誰にも言わないよう話した。

母の故郷への旅行は聶耳に深い印象を残した。特に母が貧しい生活をしていたタイ族の出身であったことが心に刻まれた。聶耳がその後、貧しい人びとや虐げられた人びとに同情を寄せ、彼らの側に立ってその芸術活動を展開したのは、この旅から受けた影響も大きかったと思われる。

母の故郷から帰ると求実小学校高等科の授業が本格的に始つた。この学校は先に記したように私立で、教育熱心な篤志家が寄付を集めて孔子廟の中に開いた。設備は不十分で机や椅子もあちこちから掻き集めてきたものばかりだった。しかし校長をはじめ教師たちは教育熱心だった。聶耳はこの学校が気に入ってまじめに授業に取り組んだ。生徒会が出来るのと彼はその会長に選ばれた。

聶耳が入学して間もない頃、こんなことがあつた。土地を所有している孔子廟当局が、孔子廟の修理を名目に求実小学校に対し工事中移転するよう求めてきた。そして竣工後は元の場所を継続使用してよいと約束した。学校は付近の家屋を借りて授業を継続したが、孔子廟当局は、工事完了後に前言を翻して学校が元の場所に戻ることを許さなかつた。学校側はたびたび孔子廟当局と交渉したがなんら進展せず、校長は校舎を取り戻せないなら学校を続けることは出来ないかも知れないと弱音を吐く始末だった。

聶耳は大いに憤慨し、「必ず校舎を取り戻すべきだ。学校は閉鎖すべきでない」とみなに訴え、生徒たちの賛同を得た。校長は生徒たちの強い要請に励まされ、校長、教師代表、生徒代表が改めて孔子廟当局と交渉することになった。聶耳は生徒代表に選ばれた。しかし当局はまったく譲歩しようとしなかつた。

止むを得ず聶耳たちは街頭に飛び出して一般の人たちに事実経過を説明し、支持を呼びかけた。事件の拡大を恐れた孔子廟当局は、小学校が使っていた全部の部屋を継続使用することを認めた。聶耳たちの校舎返還闘争は勝利した。学校はこの運動における聶耳の貢献に対し表彰状を贈つた。表彰状は玉溪の聶耳記念館に展示されている。小学生にしてすでに一端の活動家だったわけだ。

## 四、中学へ進学

一九二五年、求实小学校高等科を卒業した聶耳は、学費の安い雲南第一聯合中学に入学した。一度は進学を諦めたが、求实小学校の教師から学費は貸してあげるからと強く勧められ翻意した。

家計が苦しかったので春節（旧正月）の前には、兄と街頭の露店を手伝って春聯（正月に家の入り口に貼る対句）を書き、いくらかの金を稼いで母に渡し、残った金で自分たちの衣類や日用品を買った。

中学では英語の勉強を積極的に行った。さらにフランス人の父と中国人の母をもつ柏希文<sup>⑧</sup>という人が主宰する英語の夜学校に入った。柏希文との出会いも聶耳の成長に大きな役割を果たした。彼は聶耳に対して英語だけでなく、その他の分野でも色々と熱心に指導をし、思想面でも大きな影響を与えた。また彼は聶耳が音楽を愛好していることを知り、忙しい中時間を割き、聶耳に音楽理論とピアノを教え、聶耳が後に作曲活動をする基礎を作った。

聶耳の二人の兄も音楽が好きで、それぞれ楽器を使用することができた。よく一緒に練習したり、演奏したりしたので、近所の人たちは、また聶耳兄弟の家庭演奏会が始ったなどとよく聞きにきていたという。

この頃の聶耳を知る上で、参考になるので「私の人生観」と題する作文を紹介しておきたい。

私の人生観は、宗教家や哲学者あるいは科学者の人生観と同じではない。言うまでもなく世界は不確かなものであり、人はみな日々を無為に過ごしている。表向きそのことを自覚していない。だが実際は政府や外国人の支配下に置かれているのだ。私が望む人生とは、まず大学に入り、きちんと卒業する。そして各国を巡り、その後学術について研鑽を重ね、一定の収入を得る。そして昆明湖、西山の近くの静かで落ち着いたところ、あるいは雲南以外の風光明媚なところ



に居を求め、志を同じくする人たちと学問に励み、音楽に明け暮れることだ。その時、外国人の支配はむろんのこと、政府の干渉は受けたくない。私はこのような人生が過ごせたら良いと願っている。<sup>?</sup>

この時、聶耳は十三歳。気負いの中に無政府主義的な匂いとロマン主義が混在している。この作文に対し、教師が、「青年の志は遠大であるべきで、世間を逃れるような考えはいけない」と書き込みしている。

ところで聶耳誕生と同じ年の中華民国の成立は、二千年の専制王朝支配に終止符を打ち、アジア最初の民主共和国の誕生を告げるものだった。だが共和国の権力は間もなく袁世凱に乗っ取られてしまった。これに反旗を翻した第二革命もあえなく鎮圧される。孫文など革命派は海外に亡命を余儀なくされ、反動復古の風潮が全国を支配した。

こうした中で一九一四年に始った第一次世界大戦は中国をめぐる国際関係を一変させた。英、独、仏、露の各国は欧州戦線に全力を注いでアジアを省みる余裕を失っていた。日本はこの機会に中国を独占的な支配下に置くための軍事行動を展開する。そして既成事実を積み重ね、中国に対するかねてからの野望をまとめて袁世凱に提出した。いわゆる「二十一カ条の要求」である。

これは日本の既得権益を強化拡充するだけでなく、中国を日本の保護国にしようとするものだった。国民各階層に亡国の危機感が広がり、「要求を拒絶せよ」という世論が高まった。運動はやがて日本製品ボイコット、いわゆる「日貨排斥」として展開され、民国始って以来の民族運動になった。

この時日本は政界のみならず『東京朝日』や『中央公論』など有力マスコミがこぞって強硬手段に訴えても中国を屈服させよと論陣をはり、中国民衆の抵抗を理解しなかった。石橋湛山などごく少数の言論人が、植民地不要論を掲げて「二十一カ条要求」反対論を主張した。

日本政府の最後通牒に対し袁世凱が屈服した一九一五年五月七日と九日を民衆は「国恥記念日」とし、毎年この日を

忘れまいとデモや集会が行われるようになった。その後袁世凱は、自らが組織した帝政復活運動で中華帝国大皇帝に推挙され受諾する。この時代の逆戻りに対し、前雲南都督の蔡鍔が指導する雲南護国軍が帝政反対を掲げて蜂起し、十省がこれに呼応した。袁世凱は帝政取り消しで妥協を図ったが、反袁運動の勢いは衰えず袁は悲憤のうちに病死した。

その後、袁世凱の部下の軍閥が互いに北京の政権をめぐり、抗争を続けた。一九二四年一月からの第一次国共合作から一九二七年七月の国共分裂までの間、いわゆる大革命の時代に早熟だった聶耳は、当初こそ先のような作文を書いていたが、雑誌のレーニン特集号や魯迅の著作、厨川白村の『象牙の塔を出て』など当時進歩的といわれた刊行物を読むようになり、学生運動の渦中に飛び込み、「五・三〇事件」の犠牲者に対する募金や日貨排斥の宣伝活動に参加した。

日本では「五・三〇事件」だが、中国では「五・三〇惨案（虐殺事件）」と呼び反帝国主義の民族運動に火をつけた事件として記憶されている。発端となったのは、一九二五年五月十五日、上海にあった日本資本の内外綿紡工場で、争議中に日本人監督が組合指導者の一人を射殺し、十数人を負傷させた事件である。

射殺に憤激した上海の学生たちは、労働者支援と犠牲者救済を訴え街頭宣伝を始めた。租界当局は、「治安を乱した」という罪名で彼らを逮捕し、五月三〇日にその裁判が行われることになった。ちょうどその頃、租界当局は上海の支配強化を図る施策を実施しようとしており、さらに青島の日本資本系列の紡績工場で奉天派軍閥の保安隊が導入され、争議中の労働者八人を射殺するという事件が重なって市民の怒りは一層高まった。

五月三〇日、約二千人の学生が労働者の射殺に抗議し、「租界回収」「逮捕学生釈放」を叫んでピラを配り、演説を行った。イギリス警官隊はこれらの学生百余名を次々に逮捕し、抗議のため上海随一の繁華街である南京路に集まった一万余の学生・市民に発砲して死者十三、負傷者数十という惨事を引き起こした。この事件を契機に反帝国主義の運動が上海全市に沸き上がった。そして運動は全国の主要都市に広がっていった。

昆明でも労働者、学生がこの運動に参加し、上海の労働者を支援した。聶耳の通う聯合中学でも多くの教師と学生が

カンパ活動と日本商品の排斥運動を始めた。聶耳はこの運動に積極的に参加している。

聶耳はこの頃、「近日国内罷工風潮述評」（最近の国内におけるストライキ騒動について評す）という作文で、「五・三〇虐殺事件以降、中国の労働者は資本家の圧迫を受けている状況が続いており、ストライキの憂いを取り除きたいならばブルジュア階級を打ち砕かなければならない」と書いている。

そうした雰囲気の中で、聶耳は当時、民衆の中で流行し始めていた「インターナショナル」、「国民革命歌」、「工農兵連合歌」など内外の革命歌曲を好んで歌っていた。また学校や家で、友達と「梅花三弄」、「蘇武牧羊」、「昭君和蕃」などの民間の音楽を合奏したりした。しかし感心するのはデモや音楽に熱中するだけでなく、夜は英語学校やキリスト教青年会へ行き、英語の補習を受けるなど勉強も根気強く続けていたことである。

この頃、聶耳に衝撃を与えた事件が起こった。聶耳の母は信仰心の厚い仏教徒だった。一九二六年旧暦の二月十九日、昆明の大きな湖、滇池畔の高台にある観音山の観音寺に船で行くことになっていた。昆明の善男善女には、ここに祭つてある観音菩薩に参拝すると願い事をかなえてくれると信じられていた。母は聶耳と兄の聶叙倫を連れて宿願を果たすべく出かけることになった。その日、彼らが家を出ようとした直前、急患が訪れ予定していた船に乗り遅れてしまった。ところが、その乗船を予定していた船が定員をはるかに超過する客を乗せたため転覆してしまい、数百人規模で死者を出す大惨事になった。

この事件に対し、母は、「もし私が急患の病人を見ていなかったら、船に乗り遅れることはなかったもので、私たちも遭難していたでしょう。私たちは運の強い人間です。これも仏様の加護のお陰です。感謝しましょう」と言った。

聶耳はしばらく黙っていたが、すこし怒った口調で「これから私たちは仏教を信じる必要はありませんよ。私たちは船に間に合わなかったので災害に遭わなかったのです。これが仏様の加護であるなら、船に間に合つて観音山に行ったあの人たちはもっと仏様に加護されるべきです」「汽船があのような多数を乗せなければ、絶対に転覆するようなことは

なかつた。もし神仏がいるなら、なぜ彼らを加護しなかつたのでしょうか。おかあさん、迷信を信じてはいけません」と言った。母は聶耳の話に道理があるのでうなずいて低い声で、「お前の話は本当に正しい」と言った。

この話ほどの伝記にも記されているが、聶耳が早くから科学的なものの見方を身につけるきっかけの事件として記録されているようだ。

## 五、師範学校英語科へ

やがて聶耳は初級中学を卒業する時期を迎えることになる。だが彼の家には聶耳の勉学を続けさせるだけの余裕があるとは言えなかつた。夏休みに両親の故郷、玉溪に行った時も、時間を惜しんで授業の復習をするなど向学心に燃えていた聶耳は、どうしても進学したかつた。母に就職した場合と進学した場合の得失を列挙して熱心に説得を行った。そしてやつこのことで同意を得ると寮費や食費が公費で賄える省立師範学校の受験手続きを行った。同校の入試は難関であつたが、猛勉強の甲斐があつて高級部英語組英語学科に合格した。またまた親戚や友人から保証金や書籍代、寮で使う蒲団などを借りた。

この頃、新しく隣に引越してきた音楽好きの張庚侯という青年と知り合う。張はのちに付属小学校の音楽教員になるが、聶耳は彼の楽器を借りてバイオリンの練習を始めた。聶耳がバイオリンに打ち込むきっかけを作つた青年であり、彼との出会いはまさに運命的なものだつた。親しい女友達になる袁春暉と知り合うのも、袁が張庚侯の遠縁であつたらだ。聶耳は張庚侯とともに昆明の音楽会や演劇の舞台にも出演するようになった。

さらに学校の共青团（共産主義青年団）が組織する読書会に参加し、一九二七年末の冬休みには、マルクス主義の文

献を数多く読むようになっていた。

五・三〇運動は全中国に「打倒帝国主義」の波を湧きたたせ、広範な民族統一戦線を作り上げた。二五年七月には、広州に国民党と共産党の協力を基盤にした国民政府が結成される。しかし孫文亡き後の国民党内は左派・右派間の対立が激化し、左派の指導者の廖仲愷が暗殺され、また海軍の共産党員が反乱を企てたという口実で共産党員を逮捕し、ソ連人顧問団を弾圧する事件（中山艦事件）が起こっている。

こうした内部矛盾をはらみながらも二六年六月、中国の近代史に一頁を開いた北方に割拠する軍閥との戦い——北伐が始った。黄埔軍官学校の校長だった蒋介石が国民革命軍総司令に就いた。北伐は雲南の支配体制にも影響を及ぼした。十四年にわたって雲南を支配してきた唐繼銭体制が崩壊し、代りに昆明鎮守使の龍雲が雲南の全軍政を握ることになった。

蒋介石はその後北伐に加わった共産党が着実にその勢力を伸ばしていることを警戒し、国民党左派と共産党に対し上海で大規模な大弾圧（四・一二クーデター）を行った。蒋介石による国共合作への裏切り行為に対し、雲南の龍雲も呼応し、革命勢力への政治弾圧を強めた。そしてたびたび革命家が捕えられ犠牲になった。

その中の一人に雲南では数少ない女性共産党員で小学校教師の趙琼仙がいた。彼女は雲南の女性解放運動の中心的人物で、逮捕後は共産党の内情について自白を求められ執拗な拷問を受けるが、頑として口を割らなかつた。

この事件に遭遇した聶耳の様子について、兄の聶叙倫は『聶耳の少年時代』で次のように書いている。

ある日、私たちがちょうど食事をしていた時、聶耳が突然不機嫌な様子で帰ってきた。母は食事をとるよう勧めたが、彼はぶつきらぼうに「食べたくない」と言った。顔つきも異常だった。私が、「具合が悪いのか」と聞くと、彼は突然テールを叩き、「今日、趙琼仙先生が銃殺されるそうだ。先生がどんな罪を犯したというんだ！」。これを聞いて私たちも

驚いた。趙先生は非常に教育熱心で子どもたちに敬愛され、保護者の信用も絶大だったからだ。私はすぐに箸と茶碗を置いて聶耳に「行こう、様子を見に行こう」と言つて飛び出した。

外に出ると、ちよつと手を縛られ、足枷をつけられた三人の政治犯が護送されてくる場所だった。前の二人は男で、彼らは鋭い目付きで辺りを睨め付け、胸を張つて堂々と歩いていた。その後ろから皆のよく知っている趙琮仙先生が足枷のため足を引き摺つて歩いてきた。沿道の人込みの中から突然二人の子供が出てきて、「趙先生、趙先生、…」と泣き叫んだ。

子供たちはすぐ兵隊に追い散らされたが、趙先生は子どもたちに、「みんなは早く家に帰りなさい。みんな、さようなら」と言つた。路傍に立っていた小学生たちは、趙先生の言葉に泣き出してしまい、「趙先生、先生死なないで！」と叫んだ<sup>8</sup>。

この後二人は刑場までついで行き、この女教師が銃殺される様子を見届けている。

事件のあと、聶耳は人が変わったようになり、外から帰つてもほとんど口をきかなくなつてしまった。この事件が聶耳に与えた影響は大きなものがあつた。彼は党の指導下にある済難会（後に互助会と改める）のメンバーとして、幾度か監獄を訪れ、投獄されている革命家の救援に奔走したりもした。

反革命の逆風の中で、革命勢力に対する弾圧は一層厳しくなつていたが、聶耳はこうした事件の影響を受けて一九二八年、秘密裏に中国共産主義青年団に加入している。そこで理論を学習し、謄写版の原紙書きをはじめビラ貼りなどの活動に参加し始めた。

共産主義青年団の主要活動スローガンは、帝国主義の侵略に対し立ち上がった民衆に弾圧を加える蒋介石や彼に同調する雲南の指導者龍雲らを弾劾することだった。

この年の五月、国民革命軍が北上して山東省に入った時、田中義一内閣は居留邦人保護の名目で山東に出兵し、済南

を占拠、多数の市民を殺傷した済南事件を起こしている。また翌六月、北伐軍の北京進攻を前に奉天に敗走途中の張作霖が関東軍参謀の河本大作らの陰謀により爆殺された。学生たちはこうした日本の露骨な干渉に憤激し立ち上がった。だが学生運動は徹底的に抑圧された。聶耳は悩み、苦しんだ。何ら成果を生むことができない運動を続けることに意味があるのかどうか、挫折感に苛まれ、いつそのこと省外に出てもっと勉強したいと思った。しかし自費で大学や専門学校に進む余裕がないのは分かってきっていた。

## 六、学生軍に入隊

聶耳が悶々と悩んでいる時、湖南省郴州に駐屯していた雲南国民革命軍第一六軍が新兵補充のため昆明で学生軍の募集を行った。この十六軍の軍長である藩石生は、反蒋介石の旗幟を鮮明にしていたので、学生たちはこの軍隊が革命的な軍隊だと思い込んでいた。聶耳を含め多数の学生が応募した。学科試験と体格検査の結果、聶耳は合格した。

一九二八年十一月三十日、聶耳たちは昆明を出発した。軍隊に入ると言えば家族は心配するに決まっている。だから家族には内緒であった。当時、昆明から湖南に通ずる道はなく、滇越鉄道を経て、ベトナムのハイフォンに出て汽船に乗り換え、香港、広州を経由して郴州に向かった。

この旅行の途中、やはり聶耳の思想形成に大きな影響を与えたある出来事に遭遇した。それはこんな事件である。

十二月一日、昆明を出て二日目のことだった。聶耳ら学生軍の一行は、アミ州の旅館を出て駅のプラットホームで河口行きを汽車を待ちながらみなで雑談をしていた。そこにいま出発したばかりの汽車が女の子の両足を轢断したとの話が伝わってきた。聶耳たちが急いで前の方に行くと、切り替えポイントのところ十歳ほどの少女が横たわっており手

にかごを抱えていた。膝下が血混じりになりどこが足か分からなかった。

少女は、「おかあさん、おかあさん」と叫び、痛さを我慢して泣きながら「誰か刀か鉄砲をもっていたら私を殺して！痛いー、苦しいー」と叫んだ。周囲にいた旅客は見るに忍びず、一部の旅客は鉄道会社の社員らしい人に向かって少女をすぐ病院に連れて行くよう要求したが、別の人は、「この子は無賃乗車だったんだ、死んでも仕方ないよ」と言った。これには周囲の乗客たちも「なんて酷いことを言うんだ！」と一斉に反発した。そうこうしているうちにハノイ行きの汽車が入ってきた。これに乗り遅れたら大変なので聶耳たちは慌ててホームに引き返し乗車した。列車は何事もなかったように出発した。聶耳は少女がどうなったか気になって仕方なかった。列車の中でその少女を知っている旅客がみなに話した事故の顛末はこんなことだった。

彼女の両親は狭い田畑を耕していたが、非常に貧しく家族を養いきれないので彼女が毎日、屑炭を拾って家計の足しにしていた。アミ州に小龍潭という駅があり、近くが石炭の産地で、路上には輸送中にこぼれた屑炭がたくさん転がっていた。それは誰でも拾ってかまわなかった。彼女は毎日列車に乗って小龍潭に行き、そこで出来るだけ多くの屑炭を拾い、一元に満たない金を手にしていた。しかしキップを買う金はなかった。今日もいつものように屑炭を拾い、かごをもって踏み板に乗っていたが、発車後、ベトナム人の車掌が無賃乗車を咎められ、突き落とされた。ちょうどそこが切り替えポイントになっているところだったため、別の列車が来て両足が轢断されたということだった。

この悲惨な出来事は聶耳にとって忘れがたい記憶として残った。

聶耳らは十二月十五日、ようやく湖南省郴州の駐屯地に到着した。直ちに新兵隊に編入させられた。当初十六軍とはどんな軍隊か、また実際の軍隊生活とはいかなるものか分からなかった。しかし現実に入隊してみると、ほとんど昔流の軍隊と変わらず、非人間的な扱いをされ、腐敗が溢れていた。この期間に書かれた聶耳の日記からは、厳しい現実には直視し自分の選択に後悔せざるを得なかった無念さがうかがえる。十数日後、同郷の下級士官の配慮により、ただの新



兵から連隊の文書上士（文書担当士官）に任命された。

三月二十八日、第十六軍の將校団に従って広州に赴いた。ここで聶耳は黄埔陸軍軍官学校に入学したいと考えたが、資格が不十分だったため果たせなかった。四月八日、部隊の維持が財政的にできなくなったため、部隊はあつけなく解散となった。

四月十二日、聶耳は中国話劇運動の創始者で日本に留学したこともある歐陽予倩が主宰する広東戲劇（演劇）研究所付属の演劇学校音楽班が特待生を募集しているのを偶然新聞で知り、受験し合格した。しかし、入学の翌日宿舎に入つた後、初めてこの学校はただ粵劇（広東の地方劇）のドラや太鼓、琴や箏を学ぶだけなのを知る。よく調べもしないで軽率といえば軽率だが、自分の関心事と合わないのですぐに学校をやめることにした。同行した同郷の教官に旅費を立て替えてもらい、香港、ハノイを経由して五月初旬に故郷に歸つた。

## 七、聶耳の恋愛

昆明に戻つた聶耳は、省立師範学校もとのクラスに復学することができた。

この頃のノートや日記には、マルクスの簡単な経歴、階級闘争、唯物史観、剰余価値などについての記述がある。また友人たちと音楽グループを結成し、「ボルガの舟歌」などを歌い演奏していた。少しづつ腕前が上がってきたバイオリンを独奏し、当時流行していた藜錦暉の「三胡蝶」など児童歌舞劇の伴奏に出演した。また剽軽なところのある聶耳はしばしば草笛を吹いたり、声帯模写やマジック、タップダンスなどを演じて周囲の人々を喜ばした。

軍閥同士の争いにより一九二九年七月十一日、昆明の火薬庫で大爆発が発生し、一万人余りが死傷するという痛まし

い事故があつた。聶耳は地下の党組織が指導する「七・一一青年救済団」の主要メンバーとなり、当局に損害賠償を求め、闘争に参加した。そのため軍閥政府からマークされ、しばらくの間親戚の家に身を隠す必要に迫られた。事態が収まった後、やっと学校に戻った。

十月末、省立師範学校の演劇研究会が開催した発表会で、「ロミオとジュリエット」に出て、ジュリエット役を演じた。聶耳には俳優としての素質もあつたようで、上海に出ても所屬した映画会社で端役ながらいくつかの作品に出演した。また舞台にも出ており、その演技力は高く評価されている。

ところでこの年の末から翌年にかけて聶耳の恋愛は微妙な段階に差しかかっていた。聶耳が兄事していた張庚侯の遠縁にあたる袁春暉は、雲南省立東陸大学（現在の雲南大学）予科の学生だった。彼女とは張を交えた音楽仲間の紹介で知り合つたことは前に書いた。袁は写真を見ると小柄で童顔である。性格は穏やかで音楽好き、聶耳より一歳年下だった。袁は師範学校の国文の教員だった父親を早くに亡くし、母親に育てられた。聶耳と境遇が似ていることもあつて、いつのまにか親しくなり、二人だけで南郊外の西坝のバラ園や、西山などにも出かけるようになった。

兄の手記によれば、母は二人が仲良く交際しているのを見て、また自分も袁が気に入ったので聶耳に結婚するよう勧めるが、聶耳はまだ早いと撥ね付けた。当時は親が子どもの結婚相手を適齢になるずっと前から決めることは普通だった。母親は以前も知人から持ち込まれた結婚話を勧めたが、聶耳はまだ早いということで流れていた。聶耳は袁が好きだったが、一方でまだ自分が学生の身分であること、いずれ雲南の外に出ることを考え、母の勧めに乗れなかった。

聶耳は一九三〇年十月十九日の日記に、これまでの経歴を記し、「（一九三〇年）民国十九年一月一日、彼女を愛し始めた」と書いている。

この恋はどうなったか？聶耳が上海に出ても手紙のやり取りは続いたものの、結局実らなかつた。聶耳はかつて母に言ったように、「私はまだ何もなしていない。いま考えるべきは仕事や将来のことである。もっと機が熟してから考え

れば良い」「子どもでもできて小さな家庭にとらわれたら私の遠大な志はどうなるのか」という考えから抜け出せなかったようだ。

一方彼女は聶耳に未練はあったものの、結局母親の勧めで別人と結婚した。聶耳の一九三一年十二月二十四日の日記に、友人からの手紙で袁が友人の李奂若と付き合っていることが示唆され驚いた様子が書かれており、編集者注として「袁春暉と李奂若はともに聶耳の昆明の友人、後に二人は結婚した」と記されている。<sup>(1)</sup>

一九八五年十月に『聶耳全集』<sup>(2)</sup>が北京で出版され、聶耳の日記や一部の書簡が公開された。これを読んだ徐演という劇作家が同年秋、袁春暉が紅河州個旧市に健在なことを確かめ、インタビューを行った。彼女は七十三歳で、すっかり白髪となり、目は不自由だったが、当時のことを聶耳の日記に照らし合わせ語った。夫、李奂若は進歩的な工商業者であつたが、一九六七年、文化大革命の迫害の中で死亡したという。<sup>(3)</sup>

## 八、終わりに

昆明で最後となつた旧正月の休み、聶耳は省立師範学校の学生会の人たちとともに玉溪に行き、新劇「春閨怨」のヒロインを演じた。

四月二十四日深夜、武装した憲兵が学校を襲い、聶耳と同じ部屋の共青团員や進歩的なクラスメートを逮捕、拉致した。

五月三十日、軍閥政府が次には聶耳を逮捕するという知らせが伝わってきた。これは兄の友人が、法律機関に勤務する父親の自宅の机にあつたブラックリストに聶耳の名前が記されていたのを見て教えてくれたのである。聶耳にも危険が迫ってきた。たまたま上海のタバコ問屋から聶耳の三番目の兄に店員にならないかという話があり、聶耳が難を逃

れ代りに赴くことになった。

七月十日、聶耳はベトナム経由、香港を経て上海に向った。

上海に出た聶耳は、それから五年後、日本に渡るまで貧しい生活の中で音楽の勉強に勤しみ、三四年から三五年にかけて代表作となる作品の数々を作曲する。その革命歌曲の旋律に、生まれ育った雲南での日々がどう影響しているのか、というのが本稿の主題であった。

聶耳は医者之家に生まれたが、四歳の時に父を失い、以後貧しい少年時代を過ぎざるを得なかった。母が教育熱心だったことから向上心に富む利発な子として成長した。伝記が残るような人物には必ずエピソードがあるが、聶耳も例外ではない。これまで見てきたように、母の故郷への旅では被差別民族への同情心を養い、学生軍での体験では旧式軍隊の不条理を悟り、五・三〇運動や爆発事故への救済活動など学生運動への参加を通じて権力と闘う「思想」が形成されたのである。そして運動に明け暮れながらも常に好きな楽器の演奏は続けていたことが、後の「人民的音楽家」の誕生につながったにちがいない。まさに雲南での日々が聶耳を育てたのであり、聶耳の作品を生む母胎となったのである。

残された資料は社会主義史観が盛んだった時代に書かれたものゆえに、聶耳はいかにも模範的な少・青年時代を過ごしてきたように描かれており、いささか息苦しさを覚えないでもない。しかし聶耳にも若者としての日常生活があったはずである。そのひとつが実らなかつたとは言え、袁春暉との恋愛であった。

なお最後に雲南省にある聶耳の墓など史跡について簡単に触れておきたい。

神奈川県の大沼海岸で溺死した聶耳の遺体は、同地で茶毘にふされ、遺骨は友人・張天虚（張鶴）によって、上海に運ばれ、兄の聶叙倫が故郷の雲南省・昆明に持ち帰った。一九三七年、地元の人たちによって滇池が見渡せる西山の美人峰に墓が作られた。その後日中戦争の時代は荒れ果てていたが、共和国成立後の一九五四年一月、暫定国歌作曲者の墓として人民政府によって再建された。また文化大革命の時代に場所さえ分からなくなってしまったのを一九八五年五

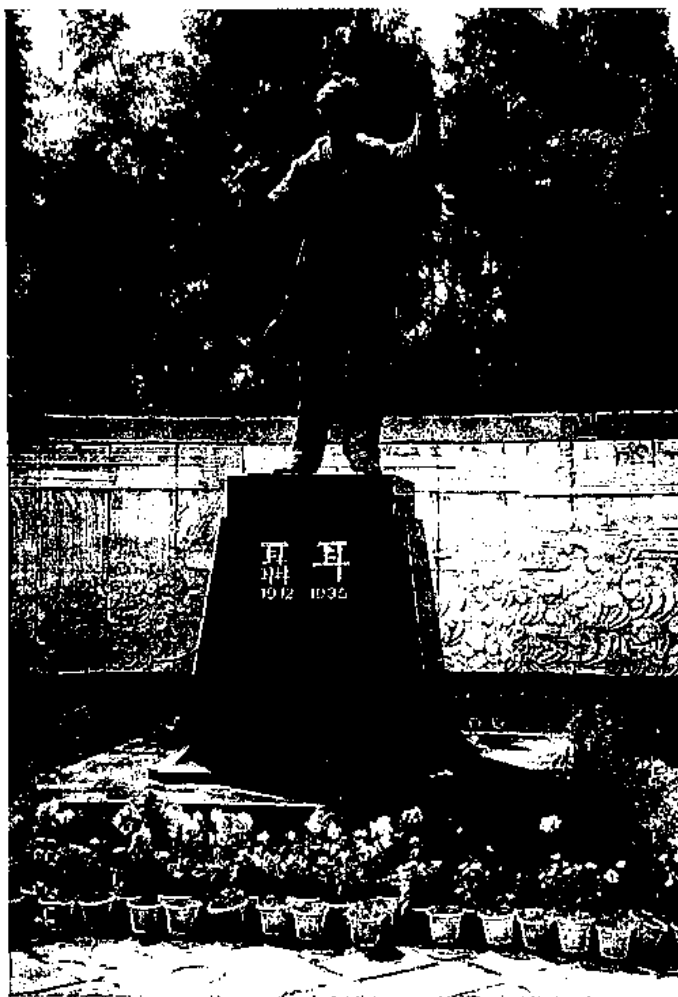
月にもとの場所に立て直された。

墓は雲南月琴（伝統的な弦楽器）をかたどっており、墓前にある七つの花壇は七音階を表現し、二十四の階段は享年を示している。墓碑の裏側には、郭沫若による墓名碑が刻まれている。聶耳が生まれ、幼年期を過ごした家が聶耳故居として市内の甬道街に残っている。古びた二階建ての建物で、地元の重点文物保護単位に指定されている。昆明には、このほか聶耳がよく散歩した翠湖の湖畔に立像と記念碑が一九八五年に共青团昆明市委員会により建てられた。

また聶耳の原籍が玉溪市にあることから、同市南門街の西端に聶耳記念公園がある。園内には聶耳の銅像と聶耳記念館が建てられている。記念公園とは別に市内紅塔区、北門街三号の繁華街に祖父が建てた家が聶耳故居として残されている。



雲南省昆明市の西山森林公園内にある聶耳の墓



雲南省玉溪市の聶耳公園内にある聶耳の立像

## 注釈及び引用

- (1) 筆者は聶耳の中国語による読みを一部で使われていたニールと表記してきたが、今回より中国語の発音に近いニエアルと表記することにした。
- (2) 溺死をめぐる事情については拙稿（東北公益文科大学総合研究論集第五号「聶耳―中国国歌作曲者と日本」）参照
- (3) 彭飛『中国雲南・岩絵の謎』祥伝社 一九九五年二六頁及び佐々木高明『照葉樹文化の道―ブータン・雲南から日本へ』日本放送出版協会 一九八二年
- (4) 『雲南雜誌』については石島紀之『雲南と近代中国―周辺の視点から』(シリーズ中国にとっての二十世紀) 青木書店 二〇〇四年二八頁
- (5) 伝記的記述については、左記の著書を参考にした。  
王懿之『聶耳伝』上海音楽出版社 一九九二年  
崎松『聶耳与玉溪』民族出版社 一九九九年  
聶耳全集編集委員会編『聶耳全集』文化芸術出版社・人民音楽出版社 一九八五年  
汪毓和『聶耳評伝』(中国近現代音楽家研究叢書) 人民音楽出版社 一九八七年  
向延生「中華人民共和国国歌作曲者―作曲家聶耳」『中国近現代音楽家伝』第二巻所収 春風文芸出版社 一九九四年
- (6) 王懿之の『聶耳伝』ではフランス人としているが、汪毓和『聶耳評伝』では外国籍と記し国を特定していない。尾坂徳司『四川雲南』ルマ紀行―作家艾蕪と二〇年代』(東方書店一九九三年)によれば、柏はイギリス人としている。艾蕪は一九二五年に雲南を訪れ、柏希文の英語学校に通い、聶耳の友人でもある陸万美と交流があったと書かれている。
- (7) 中国音楽家協会・中国音楽研究編『中国近、現代音楽史参考資料、第三編第一輯、聶耳專輯』一九五九年三頁
- (8) 王懿之『聶耳伝』六一頁
- (9) 李輝主編『聶耳日記』大象出版社 二〇〇四年一〇二頁
- (10) 崎松『聶耳与玉溪』民族出版社 一九九九年「聶耳的初恋」六八頁
- (11) (9) 二一六頁

- (12) 聶耳全集編集委員会編『聶耳全集』文化芸術出版社・人民音楽出版社 一九八五年  
(13) 王懿之『聶耳伝』八一頁―九四頁及び(10) 七二頁

参考図書・資料

- (1) 上原一慶・桐山昇・高橋孝助・林哲『東アジア近現代史』有斐閣 一九九〇年  
(2) 小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』岩波書店 一九八六年  
(3) 昆明聶耳記念室発行パンフレット「聶耳」  
(4) 『雲南之旅』広東旅遊出版社 一九九九年

中国図書からの引用は拙訳による。写真は筆者撮影。